

蘇軾における「白俗」の意味：雅と俗の関係を中心に

黄，小珠
清華大学人文学院：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1498247>

出版情報：中国文学論集. 43, pp.135-144, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



蘇軾における「白俗」の意味

——雅と俗の關係を中心に

黄 小 珠

北宋の蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士）は、唐代の白居易（字は樂天、号は香山居士）の人物像を深く敬慕した。そもそも「東坡居士」という号は白居易の詩歌に由来する言葉であり、彼は何度も「自分は樂天に似ている」と言っており、例えば「定似香山老居士、世縁終淺道根深（定めて似たり香山の老居士の、世縁終に浅く道根深きに）」とある¹⁾。また、蘇軾の詩歌は白居易の影響を強く受けており、清代の馬位の『秋窓隨筆』には、「東坡詩鎔化樂天語及樂天事甚多（東坡の詩は樂天の語や樂天の事を非常に多く取りあげる）」とある²⁾。しかしながら蘇軾は白居易の詩歌に対して不満も持っていた、その中で最も鋭い批判は「白俗」という論調である。この蘇軾の相反する姿勢について、研究者の間では様々な見方がある。まず王文龍氏は、「蘇軾は樂天の人となりは慕っていた」、「しかし、その詩に対しては、これを重んじていた形跡はほぼ見られない」と述べる。また張海鵬氏は、蘇軾は文化的な側面から白居易に憧れており、詩学では「白俗」という論述をしたけれども、白詩への賞賛と偏愛のほうがその批判よりはるかに多いとする³⁾。これらの見解に対して、筆者は蘇軾の白詩への複雑な態度は彼の雅と俗の価値判断に由来する⁴⁾と考える。本稿では、蘇軾における「白俗」の意味について、雅と俗の關係を中心に再検討したい。

一 「白俗」と「淺易」について

この「白俗」という論断は、蘇軾と姻戚關係にあり、浅からぬ交わりを重ねていた柳子玉への祭文に見える。

蘇軾における「白俗」の意味

猗歟子玉、南國之秀。甚敏而文、聲發自幼。縱橫武庫、炳蔚文囿。獨以詩鳴、天賜雄味。元輕白俗、郊寒島瘦。瞭然一吟、衆作卑陋。(ああ、子玉は素晴らしい南国の秀でた人であることよ。甚だ敏速に文章を書き、名声は幼少の頃より聞こえていた。武芸の場においては縦横無尽に振る舞い、文壇においても輝くようであった。特に詩において有名になり、天は彼に優れた弁才を与えた。元稹の詩歌の特色は軽薄であり、白居易の特色は凡俗であり、孟郊の特色は貧苦であり、賈島の特色は羸瘦である。しかし、柳氏の詩歌を二たび朗朗と吟ずれば、多くの人の作はみな卑陋に見えた。)

この文は柳子玉の詩歌を讃えるため、「元白郊島」、即ち、元稹・白居易・孟郊・賈島の作風を批判し、すべて卑陋なものとしたのである。花房英樹氏の「白俗論考」⁴⁾には、「蘇軾の発言は、特殊な事情の下でなされていた。とはいうものの、必ずしもその場に限られたものと見過ごすことはできない。平生の認識を、何ほどが含んでいるとも考えられるからである。」と述べている。それでは、その特殊事情以外の場合において、蘇軾は白居易に対してどのような認識を持っていたか。さらに、蘇軾の所謂「白俗」とは具体的にどのようなことを表しているのか。以下、筆者は花房氏の説を参照しながら、これらの問題を再考察する。

まず、蘇軾は白居易の詩文に対する総合的な評価は、決して「俗」とするものではなかった。以下、二つの材料を見てみよう。

① 李太白・韓退之・白樂天詩文、皆爲庸俗所亂、可爲太息。(李太白・韓退之・白樂天の詩文は、みな凡俗な者たちによって乱された。嘆かわしいことだ。)(蘇軾「答劉沔都曹書」『蘇軾文集』卷四十九)

② 如白樂天「贈徐凝」、退之「贈賈島」之類、皆世俗無知者所託、尤不足多怪。(白樂天の「徐凝に贈る」や韓退之の「賈島に贈る」などの類が、みな世俗の無知な者どもの仮託する対象となってしまうのは、咎め立てするまでもなく、当たり前のことだ。)(蘇軾「書諸集偽謬」『蘇軾文集』卷六十七)

このように、蘇軾は白居易の詩文が凡俗なものに乱されたのを憂慮しており、且つ平素より敬慕する李白や韓愈と白居易を同列に並べたところから見ると、彼の中では、白居易詩文の地位は決して低くなかったと言える。次に、「白俗」以外に、「浅易」という論説で以て不満を表している、次の詩題を見てみよう。

世傳徐凝「瀑布詩」云「一條界破青山色」、至爲塵陋。又偽作樂天詩稱美此句、有「賽不得」之語。樂天雖涉淺易、然豈至是哉。乃戲作一絕。(世に伝わる徐凝「瀑布の詩」にある「一條界破す 青山の色」と云う句は、至つて卑陋なものだ。また、ある人は樂天の詩を偽作して、此の句を称美し、「賽するを得ず」の語がある。樂天は「浅易」なものではあるが、決してこのように称美してはいない。そこで、戯れに一絶句を作る。)

〔蘇軾詩集〕卷二十三)

これによって、彼が徐凝「瀑布詩」を卑陋と指摘していた原因は、ほぼ詩句の「界破」の描写が度を過ぎて、いかにもぎこちないので、詩的興趣を減殺すると感じたためであった。白居易が徐凝の「瀑布詩」を賞賛した詩句を「偽作」と定めたことに鑑みて、彼は白居易を弁護していたと分かる。しかしながら、蘇軾が白居易詩歌へ対しての「浅易」という指摘をしていることから見ると、彼は白詩について、やはり不満な態度も持っていた。即ち、白居易の詩歌の描写は徐凝ほどではないものの、聊か「浅易」であるという欠点も認めていたのである。

白居易詩歌に関する「浅」の論説は、唐宋時代の詩評論家の共通の認識であった。以下の三つの例を挙げる。

① 學淺切于白居易、學淫靡于元稹(白居易に「浅切」を学び、元稹に「淫靡」を学ぶ。)(唐・李肇『唐国史補』)
② 元白尚輕淺(元稹と白居易とは「輕淺」を重んずる。)(唐・王定保『唐摭言』)

③ 梅聖俞云、「狀難寫之景如在目前。」元微之云、「道得人心中事。」此固白樂天長處。然情意失于太詳、景物失于太露、遂成淺近、略無餘蘊、此其所短處。(梅聖俞は(白居易について)「描写しにくい景色を目前に在るかのよう表現する」と云う。元稹は「人の心の中を言明する」と云う。これらは元より白居易の長所である。しかし、情意が細かく表現され、景物が度を過ぎて露わに描写されると、遂に「浅近」に陥って、余韻が残らない。これは白居易の短所である。)(宋・張戒『歲寒堂詩話』)

ここに挙げる李肇の説では白居易は「浅切」であり、また、王定保に拠れば、元稹と白居易とは「輕淺」と見なされる。この王定保の説は元稹については「輕」であり、白居易については「浅」であるとも読める。蘇軾の所謂「元輕白俗」はこの「元輕白浅」に由来すると思われる。よって、「俗」は「浅」の方向に理解することができる。この「白俗」や「浅易」の表現は、張戒の挙げる、自然の景物や衆人の情意に関する描写が「浅近」に陥って、余

蘇軾における「白俗」の意味

韻が残らないという白居易の短所と同様である。

二 蘇軾の雅俗觀念について

では、詩文評論で「俗」を用いた蘇軾は、どのような雅俗觀念を持っていたのか。

(1) 士俗不可醫（士俗たれば醫すべからず）

まず、蘇軾は儒家の伝統的な道德修養を守って、士大夫が俗に染まってはならないと主張していた。

可使食無肉、不可居無竹。 食をして肉無からしむべくも、居をして竹無からしむべからず。

無肉令人瘦、無竹令人俗。 肉無くんば人をして瘦せしめ、竹無くんば人をして俗ならしむ。

人瘦尚可肥、士俗不可醫。 人瘦せれば尚ほ肥ゆべし、士俗たれば醫すべからず。

（蘇軾「于潜僧緑筠軒」『蘇軾詩集』卷九）

蘇軾の影響を受けていた門人の黄庭堅も同様の「雅」と「俗」の弁に固執するところがある。

士大夫處世、可以百爲、唯不可俗。俗便不可醫。（士大夫が世の中で生きてゆくには、あらゆる事を為すべきであるが、俗なことだけはしてはならぬ。俗な者となれば、それは治すことができないからだ。）

（黄庭堅「書繒卷後」『山谷集』内集卷二十九）

以上のように、蘇軾と黄庭堅は、「士」として「士俗不可醫」であり、また、「俗便不可醫」という規範に則っており、自戒していた。自然界において節がある「竹」は、古来士大夫人の節操の象徴でもあり、蘇軾の「無竹令人俗」の説は、節操があれば「不俗」となるだろうという意味を含んでいた。蘇軾は、士大夫の「名節」について、以下のように解釈した。

士大夫砥礪名節、正色立朝。不務雷同以固求祿位。非獨人臣之私義、乃天下國家所持以安者也（士大夫は名節のために励んで、正々堂々と朝廷に立つべし。雷同して俸禄や官位を汲々と求めてはいけな。このことは人臣としての勝手な定義付けではなく、天下國家が頼みとし、安定するための定義である。）

（蘇軾「張九齡不肯用張守珪牛仙客」『蘇軾文集』卷七）

このように、蘇軾は、朝臣たちが「禄位」、即ち俸禄や官位を求めて付和雷同することに強く反対し、「名節」を高めんと務めることが天下の安定に繋がること、そして、それこそが士大夫の果たすべき任であることを提唱した。この「名節」については、士大夫が必ず励まなければならない独立した品格であり、即ち道德教養において「不俗」の表現であると考えられる。

（2）以俗爲雅（俗を以て雅を爲す）

しかし、前述した「士俗不可醫」の論説に反して、蘇軾には以下のような言がある。

「詩須有爲而作、用事當以故爲新、以俗爲雅。好奇務新乃詩之病。」（詩は必要性があつて作るべきものであり、典故の引用をするには古い言葉によつて新味を出し、通俗な表現でもつて高雅な作品を著すものである。奇をてらい、斬新さを出そうと務めるのは詩の悪弊である。）（蘇軾「題柳子厚詩二首」『蘇軾文集』卷六十六）

以上のように、「以俗爲雅」は、詩歌を創作する際の重要な要素の一つであつた。この詩歌の創作法は、宋詩の発展の背景に深く関係すると言えよう。蘇軾と同時代の王安石は「世間好語言已被老杜道盡、世間俗語言已被樂天道盡（世に伝わる素晴らしい言葉は既に杜甫によつて尽く言われ、世に伝わる俗な言葉は既に白居易によつて尽く言われてしまった）」といった。王安石の言は、宋代の詩人が唐詩の輝かしい成果に莫大なストレスを感じていたことの表出と言ふべきであらう。このような苦境に対して、蘇軾は「以故爲新、以俗爲雅」という詩学の創作方法を提唱した。この場合、最終的な目的は「新」や「雅」に至ることである。しかし、この「雅」は雅語によつて高雅な精神を詠んだ伝統的な「雅」の觀念ではなく、「古」いものや「俗」なるものによつて「新」しい「雅」を生み出すことなのである。

「以俗爲雅」の詩法は、馬祖や臨済を代表とする洪州禅の「平常心是道（平常心こそが行うべき道である）」という禅法と相通じるものである。周裕鍔氏が『文字禅与宋代詩学』^⑨において述べた通り、禅宗の典籍において俗語を用いた「行住坐臥」や「著衣喫飯」などの「公案」は、宋詩の「以俗爲雅」に大きな影響を与えた。禅宗に傾倒した蘇軾は、以下のような日常の世俗的な生活の中に仏性を見つるという悟りを述べていた。

蘇軾における「白俗」の意味

往時陳述古好論禪、自以爲至矣、而鄙僕所言爲淺陋。僕嘗語述古、「公之所談、譬之飲食龍肉也、而僕之所學、豬肉也。豬之與龍、則有間矣、然公終日說龍肉、不如僕之食豬肉、實美而眞飽也。」（往時、陳述古は禪話を論ずることを好み、至境を究めたと自負し、その上で私の説を浅薄なものと輕蔑した。私は嘗て述古に「あなたの論説は、飲食に喩えれば龍肉であり、僕の学んだのは豚肉です。豚は龍とは隔たりがあるけれども、あなたが終日龍肉の説を言うのは、僕が豚肉を食べ、それで実に美味しく腹一杯になることには及びません」と言った。）

（蘇軾「答畢仲举書」『蘇軾文集』卷五十六）

蘇軾は畢仲举への書簡で、陳襄（字は述古）と一緒に禪理を討論したことを思い出している。この二人は、ともに禪に傾倒したが、二人が奉じていた禪法は全く異なっていた。陳述古の玄妙なる禪理に対して、蘇軾は「超越的なもの」に拘泥せず、平俗な生活において禪の味わいを楽しむことを主張していた。彼はこの二つの修行方法を龍肉と豚肉を食べることで比喩した。常識に拠れば、龍肉が高雅なものであり、豚肉が通俗なものである。しかし、龍肉はただ夢の中でしか見ることができず、食べられないものであった。豚肉は一見俗っぽいけれども、「実美而眞飽也」なものであった。「以俗為雅」の悟りのように、蘇軾は崇高なる禪の教えを実際の生活の中で味わっていたのである。

このように、蘇軾の雅俗に関する考えは複雑であった。彼は儒家の伝統的道德によって、士大夫としての「雅」と「俗」の弁を奉じ、「士俗不可醫」という戒めを厳守していた。しかし、その一方で、彼は世俗から仏性を見るところという禪理によって、生活態度や詩歌創作において、「以俗為雅」の法則を提唱していたのである。

三 蘇軾の「白俗」への受容について

「白俗」の説は蘇軾の白居易詩歌への受容の一部分であろうと考える。本節では、蘇軾の「白俗」への受容について考察してみたい。

まず、南宋の周必大（一一二六～一二〇四）の以下の論説から始めよう。

本朝蘇文忠公不輕許可、獨敬愛樂天、屢形詩篇。蓋文章皆主辭達、而忠厚好施、剛直盡言、與人有情、與物無著、大略相似^①（本朝の蘇文忠公は軽々しく誰かを認めることはなかったが、ただ白樂天だけは敬愛しており、公の詩篇にはそれが頻りに表れている。おそらくは彼らの詩文が意味を明確にすることを主眼とし、懇々と丁寧に言い表すのを好みながら、剛直に言葉を尽くし、人に対して情味がありながら、物に対して執着することない点でおおよそ似ているからである。）

（宋・周必大「二老堂詩話」）
周必大は蘇軾がかねてより白樂天の人となりを慕っていたことについて、幾つかの理由を挙げて論じてきたが、特にここに云う「辞達」について注目したい。「辞達」は平易や滑らかな言語によって、意味を明確にすることである。即ち、蘇軾が白居易の詩歌の「浅易」の傾向に不満を持ちながらも、その分り易い部分に共感した面もあると考えられる。

この矛盾する態度について、清代の査慎行（一六五〇～一七二七）は『初白庵詩評』の中で、蘇軾の「李頎秀才善画山以両軸見寄仍有詩次韻答之」の、

平生自是箇中人、欲向漁舟便寫真。

平生自らはれ箇中の人、漁舟に向て便ち真を写さんと欲す。

詩句對君難出手、雲泉勸我早抽身。

詩句君に対して手を出し難く、雲泉我に勧めて早く身を抽かしむ。

年來白髮驚秋速、長恐青山與世新。

年來白髮秋の速かなるに驚き、長く恐る青山世と新なるを。

從此北歸休悵望、囊中收得武林春。

此れより北に帰らば悵望することを休めん、囊中収め得たり武林の春。

に対して、「先生不滿意於樂天・東野、然時一學其格。如此篇者移置『長慶集』、正復難辨^②（先生は樂天や東野に不満を持ちながらも、然し時にはその彼らの格調を倣っていた。このような詩篇を『白氏長慶集』に移入すれば、確かに作者の判別は難しい）」と評していた。以上のように、この李頎への詩については、文字通りの意味に過ぎず、日常性の対話を表象し、白詩のような「浅易」の特徴を含んでいた。

また、紀昀も蘇軾の「新灘」・「張寺丞齋」・「劉丑斯詩」・「異雀」などの作品を「純是香山門徑（純粹なる白香山の門徑）」や「香山一派（白香山の流派）」と評していた^③。さらに、現代の錢基博氏も蘇軾の詩を「得白香山之容易（白香山の平易を得た）」と述べている。これらから見れば、蘇軾が「白俗」を批判したけれども、彼の詩が白居易

蘇軾における「白俗」の意味

の影響を受けた可能性も十分にあると指摘できる。

蘇軾は白居易の詩歌を全面的に受容したわけではなく、「以俗為雅」という詩法を持って、その「淺易」に過ぎる部分を改造したと言える。蘇軾の詩の中で、白詩を取り入れた彼の作品を白詩と比べれば、「淺易」の弊害を除いて、もっと含蓄に富んだ作品に仕上げていることがわかる。以下の例を分析しよう。

①山下望山上、初疑不可攀。

誰知中有路、盤折通巖巔。

山下より山上を望めば、初めは攀つべからざるかと疑ふ。
誰か知らん中に路あり、盤折して巖巔に通ずるを。

（白居易「遊悟真寺一百三十韻」「白氏文集」卷六）

②仰觀初無路、誰信平如砥。

仰ぎ觀れば初め道無し、誰か信ぜん平らかにして砥の如きを。

（蘇軾「金山妙高台」「蘇軾詩集」卷二十六）

この二首の詩はすべて山の麓から頂きを仰望し、最初に登る道がないことを疑ったが、最後に順調に行けるということを描写するのである。白居易は正面切つて、このことを平板に書き出して、屈折の趣が少ない。一方、蘇軾は洗練した言語と飛躍的な構想によって、もっと含蓄のある詩とし、雅致の趣を表出している。「仰觀」二字は「山下望山上」一句の意味を含んで、凝縮された言葉で要領を得たものである。また、蘇軾の「誰信平如砥」一句は、白居易の「誰知中有路、盤折通巖巔」二句を凝縮した形とも言える。

次に、情意の表現について、蘇軾は意識的に、白居易の直流的な発想を避け、抒情的な余韻を残している。以下の二つの例を比較して見よう。

①可憐身與世、從此兩相忘。

憐むべし身と世と、此より両つながら相忘れん。

（白居易「渭村退居寄礼部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻」「白氏文集」卷十五）

②身世永相忘。

身世永く相忘る。

（蘇軾「過大庾嶺」「蘇軾詩集」卷三十八）

白居易は上句の想が下句に直線的に流れ進み、諄く感情を述べている。蘇軾は白居易の二句を「身世永相忘」に洗練して、簡潔な抒情で豊富的な意味を読者に感じさせていると言えよう。

このように、白居易の詩歌は、確かに景物や情意に関する描写が浅薄であり、余韻を残さない傾向にあった。こ

の点を、蘇軾は「白俗」や「淺易」と見なした上で、受容して推敲を加えていたことが窺える。即ち、度を過ぎて露わに描写した景物を精鍊させ、こと細かに述べた情意を簡潔にしながら含蓄を備えた表現に変える。これこそ「以俗為雅」という詩法の成功した例であつたと思われる。

また、蘇軾は、「白俗」に対して表現を独自に洗練させたが、これには精神面の批判もあらうと推測する。上述のとおり、蘇軾は精神的な形態において、雅と俗の弁を嚴守し、高雅を重んじて、俗念を去ることを提唱していた。これに対して、白居易の精神世界においては、世俗のしきたりや官吏の俸禄から抜け出せなかった。錢鍾書氏は白居易の「移家入新宅」における「幸有俸祿在、而無職役羈。（幸ひに俸禄の在る有るも、而して職役の羈す無し。）」という詩句を「詞查意盡、調俗氣麤」（詩句が混じり合い、意が尽きて、格調が卑俗化し、雰囲気が紊乱になっている）と批判した。この「詞查意盡」は芸術的な表現における弊害を指し、「調俗氣麤」は作品の「卑陋」の精神格調を指摘したのであつた。

さらに、蘇軾の門人の黄庭堅は既に、この二人の精神の格調の違いについて以下のように論説していた。

樂天名位聊相似、卻是初無富貴心。 樂天の名位 聊か相ひ似たり、却て是れ初めより富貴の心無し。

（黄庭堅「子瞻去歲春夏侍立邇英、子由秋冬間相繼入侍、作詩各述所懷。予亦次韻」其四『山谷集』内集卷九）

「富貴心」の有無には、白居易と蘇軾との精神境地の重要な相違であつた。即ち、「士俗不可醫」の道德の基準を保持していた蘇軾は、必ず白居易詩歌のこのような俗念を超越しようと望んでいた。

結 び

以上、「白俗」の説は蘇軾の白詩批判である反面、彼の白詩受容の一部分でもある。蘇軾の白詩への矛盾するこの態度には、彼自身の雅俗觀念と深く関係がある。即ち彼は「以俗為雅」の法則によって白詩の「俗」や「淺易」の傾向を自発的に吸収し、その冗長な部分を凝縮し含蓄のある表現に変えていた。また精神修養面においては、彼独自の「不俗」の基準により、白詩の卑俗な精神格調に対し、不満な態度も持っていたのである。

蘇軾における「白俗」の意味

注

※本稿の白居易や蘇軾の詩文の引用は、岡村繁『白氏文集』（明治書院、新釈漢文大系、『四部叢刊』所収の那波本）、清・王文誥輯註、孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、二〇〇七年）、孔凡礼点校『蘇軾文集』（中華書局、二〇〇四年）を底本とする。

- (1) 蘇軾「軾以去歲春夏、侍立邇英、而秋冬之交、子由相繼入侍、次韻絕句四首、各述所懷」の其四より引く。また、「次京師韻送表弟程懿叔赴夔州運判」にも「我甚似樂天、但無素與蠻。」とある。
- (2) 清・王夫之『清詩話』（上海古籍出版社、一九九九年）八二七頁。
- (3) 王文龍『東坡詩話全編箋注』（西南師範大學出版社、一九九六年）四九頁。張海鳴著、阿部順子訳「蘇軾における白居易の文化的受容と詩学批判」（『橄欖』第一一号、二〇〇二年）。
- (4) 花房英樹「白俗論考」（京都府立大學學術報告、『人文』第二十一号、一九六九年）八九頁。
- (5) 唐・李肇『新校唐国史補』卷下（台北世界書局、一九九一年）。
- (6) 唐・王定保『唐摭言』卷十一「無官受黜」の条（中華書局、一九八五年）。
- (7) 宋・張戒『歲寒堂詩話』卷上（中華書局、一九八五年）。
- (8) 本稿で使用する『山谷集』テキストは台湾商務印書館影印文淵閣四庫全書本（一九八三年）とする。
- (9) 宋・胡仔『茗谿漁隱叢話』の「杜少陵九」の条（人民文学出版社、一九六二年）。
- (10) 周裕鍔『文字禪与宋代詩学』（高等教育出版社、一九九八年）、二〇六―二二七頁。
- (11) 宋・周必大『二老堂詩話』の「東坡立名」の条（中華書局、一九八五年）。
- (12) 清・查慎行『初白庵詩評』卷中（張氏涉園觀樂堂本、清・乾隆四十二年）。
- (13) 清・紀昀『蘇文忠公詩集』（韞玉書房本、清・同治八年）。
- (14) 錢基博『中国文学史』（上海古籍出版社、二〇一一年）、五〇一頁。
- (15) 錢鍾書『談藝錄』（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇八年）。